Shinshu University Institutional Repository SOAR-IR

『或る女』の言葉遣いについて ： 「いらっしゃる」「なさる」を調査する過程で

著者	中山 美佐子
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 4: 20-26(1985)
発行年月日	1985-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022372

(C) 1985 the Author.

『或る女』の言葉遣いについて

―「いらっしゃる」「なさる」を調査する過程で―

中山　美佐子

はじめに

『或る女』は、大正二年に連載を終えた『或る女のグリンプス』の改作であり、大正八年、有島武郎、四十一歳の年に刊行された作品である。国木田独歩の恋人であった佐々城信子（作中では早月葉子）という女性をモデルにしたものであると言われ、改作の良し悪しはいろいろと指摘されているが、文章の表現性やリズム感が向上し、生硬な文章から脱却したという点は、大きく認められている。

「いらっしゃい」「なさい」という、命令・勧誘表現の性格を調べる目的で「いらっしゃる」「なさる」を調査考察する過程で、大正期における資料の一作品「或る女」に、他には見られない用例が幾つか見出された。

モデルとなった実在のヒロインが、実際これから問題とする言葉遣いをしていたのか、それとも有島の文学的才能たる創作であるのか、これは知る由もないが、いずれにしても、当時、大正時代の人々の言葉遣い、言語感覚とは無関係ではあるまい。

「いらっしゃる」から

尊敬を表わす敬語動詞「いらっしゃる」をまず本動詞・補助動詞に二分類してその用法をみてみると次のようなことが言える。

本動詞の用法における「いらっしゃる」の意味は「行ク」「来ル」「居ル」であり、その動作主体は人物そのものであるのに対し、補助動詞の用法は「～ている」「～である」の意味を主に、人物に属する物にも多く用いられ、「肩にゴミがついていらっしゃいますよ。」とか「結構なお住まいでいらっしゃいますね。」などのように使われる。そのため、補助動詞としての用法は使用範囲が広い。

『或る女』にも、この補助動詞の用例（いずれも話し手は葉子）において、丁寧過ぎるかと思われる使い方が見られた。

「…。さ、おはいり遊ばせ。なんぞ御用でもいらっしゃいましたの」

葉子→興録（角川文庫P86ℓ18）

聞き手である興録に対しての敬語ではあるが、葉子自身の品位保

持という意図が多分に大きな要素であると考えられる程、過剰敬語たる感が強い。

敬語を用いる会話の場面では、その場面場面において様々な要素が複雑に絡み合って、敬語を話す人物・聞く人物の意識に働きかける。それら要素には、敬意の存在や距離感、動作主体や聞き手との関係把握等があり、目上の者や親しくない者、天皇などのある程度絶対的な使用を認知せしめられている者、先生や上司など、社会的に敬語が要求されるもの―に対し、それぞれ敬語が使用される訳である。が、敬語を用いること、適切にこれを使い得ることによって会話のレベル・性質といったものが自ら定まり、話し手の品位とある種の陶酔感を高め、聞き手にも（感じ方は話し手との関係によって好、悪、皮肉も含め様々であるが）一般的には良い感じを与えるといった一面も見逃せないだろう。

特に、「アクセサリーとしての敬語」という言葉があるように、敬語を用いることによって得られる上品さというものは、女性にとってはまたとない魅力であろう。この作品全般にわたって葉子の話す言葉遣いから感じられるのはまずこの点である。自信・才気・プライドを合せ持つ（と描かれている）葉子の丁寧過ぎるかとも思われる言葉はそんな意識（もしくは潜在的なものかと思われる無意識のうちのもの）から出ているかと考えられる。

同じく補助動詞の用法のものに次のような用例も見られる。いずれも現代では聞き得ない、過剰敬語とされるものであろう。

「用は後で言います。まあおかけなさい」
―省略
「何御用でいらっしゃいます」
そのわざとらしい造り声の中にかすかな親しみをこめてみせた言葉も、肉感的に厚みを帯びた、それでいて賢しげに締りのいい二つの唇にふさわしいものとなっていた。

葉子→倉地（P136 ℓ6）

「…たいそうおもしろうございましたこと。あんなに委しく御通信になりましてねえ、お忙しくいらっしゃいましたろうに。…」

葉子→田川夫人（P371 ℓ16）

後者の例における場面は多分に皮肉を込めた言葉を発しているものであり、聞き手（＝動作主体）の田川夫人は、葉子と張り合う存在である。嫌味と皮肉をこめてたいそう丁寧に、敬語を過剰使用するのかもしれない。

「歯がゆくはいらっしゃらなくって」
と切り返すように内田の細君の言葉をひったくって、
「私だったらどうでしょう。すぐおじさんと喧嘩して出てしまいますわ。…」

葉子→内田夫人（P51 ℓ5）

「歯がゆい」という形容詞に接続している訳だが、一般的な用法「おきれいでいらっしゃる」「可愛らしくていらっしゃる」などとは明らかに異なり、奇異な感さえ与える用例である。

以上4例は、「いらっしゃる」から見た『或る女』の葉子に特有な過剰敬語と考えられたものである。別の面からも続けてみてみよう。

「なさる」から

「なさる」は「する」の意の尊敬を表わす敬語動詞であるが、本動詞、補助動詞の用法ともに、本動詞「いらっしゃる」同様、人物に属する物について、それを通してその人物に敬意を表わすといった用法は普通ない。が、「なさる」を本動詞、補助動詞、（補助動詞のうち更に丁寧な、敬意の度合いの高いものとして）「お～なさる」「ご～なさる」の四型に分けて調査考察した結果「お～なさる」型に一例、人物に属する物に「なさる」を用いている例があった。（表1）

「…。…これで切ってもいいでしょう」

「あらそんなものでもったいない…もっと低いものはおありなさらない？…」

葉子→岡（P127ℓ3）

葉子と岡がトランプをしている場面で、この場合の動作主体は、岡の持っているトランプである。「もっと低いカードはないのか（こんな高いカードを今から出すなんて、ゲームのやり方が不手際だ）と尋ねているので、当然、敬意の対象はそのトランプを通し

資料作品一覧表

資料番号	作品名	文庫名	全ページ数
①	浮雲	角川文庫	205
②	破戒	岩波	340
③	それから	角川	291
④	田舎教師	角川	262
⑤	雁	岩波	133
⑥	或る女	角川	504
⑦	友情	岩波	125
⑧	暗夜行路	角川	462
⑨	斜陽	新潮	168
⑩	幽霊	新潮	220
⑪	太陽の季節	新潮	67
⑫	海と毒薬	新潮	172
⑬	砂漠の塩	新潮	313
⑭	水中花	新潮	189

動作主体＼資料	1人称	2人称	3人称	3人称内訳 1人人	2人人	2人物	3人人
①		5	7				7
②		12	10				10
③		1					
④		1					
⑤			3				3
⑥		18	4		2	①	1
⑦		6	3		1		2
⑧		2					
⑨		3	1				
⑩		1					
⑪							
⑫		4					
⑬		8					
⑭		18	1		1		
計		76	29		4	1	24

「お～なさる」型
表―1　動作主体の人称別

敬意対象＼資料	1人称	2人称	3人称
①		5	7
②		12	10
③		1	
④		1	
⑤			3
⑥		21	1
⑦		7	2
⑧		2	
⑨		3	1
⑩		1	
⑪			
⑫		4	
⑬		8	
⑭		19	
計		81	24

「お～なさる」型
表―2　敬意対象の人称別

て、その持ち主の岡（＝聞き手）である。そのように敬意の対象を考えると、三人称から二人称への移向が見られる。（表2）

この例も『或る女』（しかも話し手はやはり葉子で）にのみ見られた特殊な一例と言い得ることができる。普通このような、人物に属する物にまで着き用いられる用法が「なさる」には見られないから、ここでもやはり過剰敬語であるといった感は免れない。

命令・勧誘表現から

尊敬語「いらっしゃる」「なさる」の命令・勧誘表現（「いらっしゃい」「なさい」に代表される）は、尊敬語である「いらっしゃる」「なさる」とは別の、異なった性格をもつように思われる。同じく尊敬語でありながら、命令・勧誘の表現形式をとるとき、それは主に目下に向って発せられる。

「さあここにいらっしゃい。（そう言って葉子は妹たちを自分の身近にすわらせた）」

葉子→愛子・貞世（P314 ℓ5）

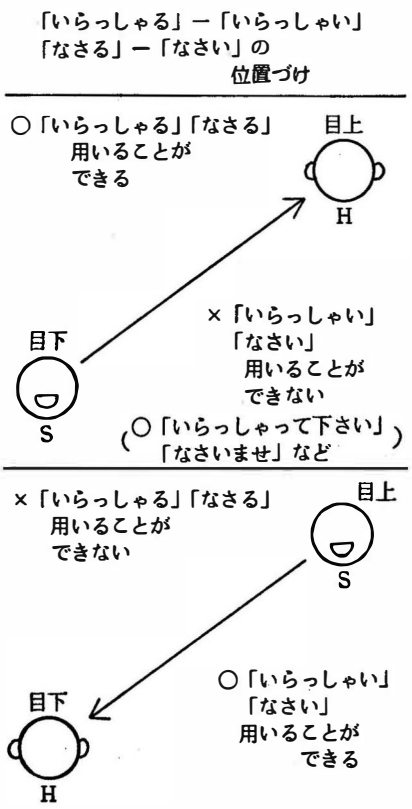
「いらっしゃい」「なさい」はこのように下向の待遇表現であるが、小さい者へ、愛する者への親愛語的な性格も見逃せない。大石初太郎氏は次のように述べている。

「本来、敬語の系統に入るはずの「イラッシャイ」「チョウダイ」「ナサイ」が、敬語よりむしろ親愛語の性格をもつものになっていることは注目される。これらがいずれも要求的表現であることも無関係ではなかろう。ただしそれも「イラッシャイマセ」「ナサイマセ」という形を取れば明瞭に敬語になる。なお、「イラッシャイ」「チョウダイ」「ナサイ」を美化語とする見方もあろう。親愛語・美化語の両性格を合わせもつものと見ていいかもしれない。」

大石初太郎「待遇語の体系」
「論集　日本語研究9　敬語」より

また、「いらっしゃる」と「いらっしゃい」「なさる」「なさい」の性格をそれぞれ考えてみると一応、次の図のような位置づけが出来るかと思われる。

図1



目下の者が目上の者に対して、命令・勧誘表現を用いる場合、「いらっしゃい」だけではなく「いらっしゃって下さい」「いらっしゃいませ」などのように恩恵表現や聞き手に対する丁寧語的要素が下接するのが普通である。

ただでさえ、過剰敬語気味の葉子においては、次のような例が見られる。

「今日のお立替をどうぞその中から…明日はきっといらしってくださいましね…お待ち申しますことよ…さようなら」

葉子→古藤（P38ℓ16）

葉子はあわてて

「まあそんなことちっともありませんことよ。古藤さんそんなことおっしゃらずにしまいまでいらしってちょうだいどうぞ。皆んなで途中までお送りしますから」

葉子→古藤（P350ℓ8）

「いらっしゃる」と「いらっしゃい」を図1に反し、両用できる関係に、恋人・夫婦関係が掲げられる。葉子→倉地の次のやりとりを見てみよう。

「今日は私の部屋でおもしろいことして遊びましょう。いらっしゃいな」

そう言って少女が少女を誘うように牡牛のように大きな倉地を誘った。

葉子→倉地（P279ℓ2）

「あなたの御様子でお心持ちが読めない私だとお思いになって？私ゆえに会社をお引きになってから、どれほど暮らし向きに苦しんでいらっしゃるか…そのくらいは馬鹿でも私にはちゃんと響いています。―省略―…やはりあなたは私を親身には思っていらっしゃらないのね…」

葉子→倉地（P328ℓ17、P329ℓ7）

当然女性→男性という場合のみ見られる例だが「いらっしゃい」（「なさい」）の親愛語的性格を更に浮き彫りにするべき事実であろうと思われる。

美化語という性格の存在も確かにうなづける。葉子が妹達をはじめ、目下の者にも「いらっしゃい」「なさい」等を用いるのは、丁寧な、美しい、品の良いことばとして、この二語を捉えているからであろう。

「今朝から私はこんなに生まれ代わりました御覧なさい」

と言って誰にでも自分の喜びを披露したいような気分になっていた。

葉子→（P149ℓ15）

聞き手を選ばないこの言葉は、まさにその一例かと思われる。

ところで、話し手と聞き手、動作主体の三者関係を考えてみた場合、その敬語動詞の動作主体（動作の為手）は、まず即ち聞き手である場合が多く、（聞き手指向性の働きが大きいかと思われる。）それとともに聞き手側の人物・話し手より聞き手との距離が近い人物である場合が多い。

現代では普通考えた場合、自分の身内のことを他人に話すときに、謙譲語こそ当然であれ、尊敬語を用いるということは、有り得ない。尊敬すべき者とされている父母にあっても、他人に話すとき

は、「父が参ります」とか「母がそのように申しておりました」などのように、謙譲語を用いるのが一般的である。

すると次のような一例はどのように考えたら良いのであろうか。

「今日は帰りが遅くなるかもしれませんから、お嬢さんたちだけで校友会にいらっしゃいってそう言っておくれ」

葉子→車夫（P6ℓ6）

動作主体である〝お嬢さんたち〟というのは葉子の妹達のことである。直接語法であるとはいえ「いらっしゃい」という命令・勧誘の表現であるとはいえ、聞き手である車夫との三者関係を考えた場合、動作主体は、明らかに話し手との距離の方がより近い、話し手側の人物である。車夫という、自分より（また自分の妹達より）身分の低い、目下の者を聞き手としたからこそ用いることが出来たとも考えられる。

本動詞「いらっしゃる」において「敬意の対象は、何人称側にあるか」を見た場合（三者関係の距離で、二人称側の人物と見做されるものは二人称へ、一人称側の人物と見做される前述の例のようなものは一人称へと考えると表3のようになった。やはり、一人称側に組み込まれるのはこの一例だけで、他に例を見ることはできない。

資料＼敬意対象	1人称	2人称	3人称
①	①	2	1
②		4	3
③		12	1
④		4	
⑤		2	4
⑥		38	20
⑦		16	5
⑧		10	12
⑨		8	4
⑩		2	
⑪			1
⑫		1	
⑬		18	
⑭		8	2
計	1	124	54

表一3　本動詞「いらっしゃる」敬意　象の人称別

葉子は良家の育ちであった。―車夫という使用人の身分を意識しての言葉であったのだろうか。

実際、かつての古風な貴族社会や良家においてはこのような言葉遣いが実在していたようである。

「…たとえば、今日ではやゝ古風ないわゆる良家の両親が、或る年令以上の子女のことを召使に向って話す場合を想像してみると、

坊チャンハモウオ帰リニナッタカ？

というふうに自分の子女にも敬語を使いそうだが、それで正しいわけである。話手自身のことは後まわしにして、主として相手との上下を考えたらいいのである。

三上章「敬語法のA線」

「論集　日本語研究9　敬語」より

補助動詞「いらっしゃる」の用法でなら、太宰治の『斜陽』に、こんな例も見られる。

（動作主体は自分の母親である。）

「わかりました。お母さんは？」

と藤田さんは、いたわるような口調で、しずかにおっしゃる。

「お座敷にやすませておりますの。ひどくおどろいて

いらして…」

かず子→村の村長

（新潮文庫「斜陽」P32ℓ11）

『斜陽』の場合、上流階級（貴族社会）を描いた個性的な作品である点で、主人公かず子が用いる言葉はかなり独自の、特殊性を帯びたものとなっていることは、今まで多くの指摘があるものである。かず子の場合、母親への尊敬の念が先に立ち、自然とこのような表現になるのであろう。そううなづけても、やはり一風変わった表現であることには変わりがないであろう。

まとめ―葉子とその敬語―

葉子の敬語の使い方を単に過剰敬語だと言ってしまうのは易しいが、この長編小説『或る女』の成功を考えると、この言葉遣いが、葉子の人物像のイメージ化を助けた役割は、それなりに大きいと思われる。

葉子は、文豪、国木田独歩の愛人であり、一度は妻であったが、独歩を捨て、家出してしまったほどの女である。当時の世間からみれば変わった女、生意気な女であったことだろう。封建的なものが多く、強く残存していた当時の社会にあつて、倣い従うだけの女性ばかりが多く、それが当然だという風潮のさなかで、一人、気概をもって自分の道を自分で切り開こうとする葉子は、有島の細かな心理描写を始めとした、鋭く、豊かな描写によって、今も尚、私達読者の目の前に潑剌と、生き生きと、その姿を現わす。

丁寧過ぎるとも思われるその言葉遣いは、そんな葉子の品位をいやおうなしにも盛り上げ、彼女の才気・自信に満ちた強い、勝気な性格・厳しい良家に育った―その育ちの良さ・高いプライド・美しい姿態・容貌―それら一つ一つを絶えず彷彿とさせる。この小説の雰囲気とイメージ作りに大きく貢献しているといっても過言ではないだろう。

本稿は昭和六十年一月に、信州大学教育学部に提出した卒業論文「現代日本語における敬語動詞「いらっしゃる」「なさる」の命令・勧誘表現についての考察」をもとに、異なる視点から余説という形で書きまとめたものです。数々の反省と抱負を胸に宿しつつ、本研究を御指導下さった細川英雄先生、京極興一先生に、記して感謝の意を表します。